

日本中を走り、目で見て、耳で聞いて

国土地理院で地図を作って四十年

統一した規格で日本全国をカバーする最も縮尺の大きい地図――。
国の基本ともなる国土地理院の二万五千分の一地形図作りには、
四十年近く携わってきた元技官の山岡光治さん、
当時の苦勞や地図の作り方を聞いた。

元国土地理院技官
山岡光治

●やまおか・みつはる 1945年神奈川県生まれ。北海道立美唄工業高校を卒業後、国土地理院に技官として入所。札幌、東京、つくば、富山、名古屋などの勤務を経て、中部地方測量部長を務めた。『地図を楽しもう』（岩波書店）『地図の科学』（SBクリエイティブ）など著作多数。

札幌で就職したい

幼いころから地図帳を愛読書として育ったという「ああ、やっぱり」と思われそうですが、実は最初から国土地理院で働きたかったというわけではないんです。なりゆき、とでもいいでしょうかね。

私は神奈川県横須賀で生まれ、

終戦後に父の故郷である北海道に移りました。父は炭鉱で働いていましたが、思い起こせば経済的に貧しかったかもしれない。少なくとも、炭鉱夫の家はどこも同じ、文化的に貧しかった。わが家にも、宗教本以外の書籍は、ほとんどなかった。その中で、兄や姉のお下りの地図帳は、教科書の中で最も教科書的でない、しかし夢のある本として、いつ

まで眺めても飽きないものでした。何を知りたいというわけでもない、何を記憶したいでもない、縁が擦り切れそうになった畳に寝そべって、一日中それを眺めることが楽しかった。そのうち、国々の名や都市名を諳んじるようになり、巻末にあった世界の川、山、人口、気候といった統計資料にもくまなく目をやり、たびたび「飛ぶ夢」を見る少年になっ

ていた。

実際に、よく空を飛ぶ夢を見たんですよ。たいていの場合、学校の裏山のとっぺんや、よく遊んだ段々畑の途中からふんわりと飛び出す。鳥になったような気分や見下ろした下界の景色が素晴らしいと感じるのは、ほんの瞬間で、ほどなく落下のスピードが増して、地上が迫ってくると夢は終わりです。

中学三年になると、母親に「大学へは行かないよ」とひとこと話して、工業高校の土木科に進みました。土木技師になるつもりで勉強し、トンネルや橋を造りたいという希望を持って、就職試験を受けたんです。当時は高度経済成長の売り手市場でしたのに、世間知らずの私は、最初に受けた会社の面接で落ちてしまいました（笑）。次を受けるとい選択肢もあつたのですが、「まあ、しょ

うがない、体も小さいし、公務員になるか」と考えを変えました。すでに北海道庁の試験と国家公務員の試験に受かっていましたので。

道庁の採用通知には、勤務先が稚内と記されている。稚内の人には怒られるかもしれませんが、ほぼ道産子であるとはいえ、最北の稚内は嫌だなあと（笑）。私が住んでいた美唄から、いまでも列車で五時間ぐら

いかかり、五月の終わりに雪を見ることもある。道庁に勤めている兄がいる級友に「稚内に勤務したらその後どうなるの?」と聞いてもらったら、「いや……なかなか帰ってこられないらしいよ……」と言われた。優秀な人は最初から札幌勤務の場合が多いらしく、稚内では少し偉くなつてやつと札幌に帰れるかどうかだというんです。どうしたものかと思っていたとき

に国土地理院の採用通知が来て、こちらの勤務地は札幌と書いてあったので、すぐに決めました（笑）……が、甘かったですね。当時、国土地理院の本院は東京の目黒にあつて、札幌は日本全国のブロックごとにある地方測量部の一つだったので、その後、家族とともに全国を転々とすることになりました。

バイクでぐるぐる

当時の国土地理院は、現場を担当する高卒と、キャリアを目指す東大などの国立大出と両極端でした。高校でも大学でも測量や地図作りを専門に教えている学校はありませんから、ノンキャリアには、入つてすぐに一年の教育研修があり、五〜七年すると試験選抜されて、二度目の研修がある。明治時代から続く、この教